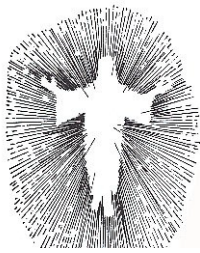


# 玉川教会たより

NO. 472

8月16日



▼もう一つの解釈が、あるハ。▼或るハ、患者が、奇跡

▼イエスさまは何故「なおりたいのか」と問われたのでしょうか。男は治りたいからこそ、ここに居たのではないのでしょうか。▼治りたいのか、治りたくないのか分からないような様子が見えたからに違いありません。例えば病院で、医者がこのようなセリフを吐く時があるでしょう。▼病気にも信仰にも、マンネリがあります。多分生きることにしても。▼「起きて床を取り上げて歩きなさい」つまりは、自立しなさい。そうしなければ立ち直ることは出来ない、イエスさまは、そう言っておられます。信仰でも、同様のことが言えます。

## ブエロニカのハンカチ

的に癒され、外出が許されました。昔の主治医を訪ねましたが、両親の墓地も知れず、妹の嫁ぎ先も知れません。戸籍が抜かれ、死人として扱われる差別の実体がありました。▼彼は、「こんなことから治るんじゃないか」と嘆き、結局入水自殺してしまいました。奇跡的に癒やされたのに、彼は救われず、むしろ絶望しました。▼この聖書のポイントは、一番先に入った者だけが、癒されることにある。同病相憐れむ者同士が、水が動いた時に、競争相手になり、敵になります。醜い競争が繰り広げられました。男はその競争に破れ続けました。言葉で表現すれば、あまりにも軽いが、人間不信です。既に手が痛いとか足が痛いとかの次元ではない。根元的な痛み(山本周

五郎)を覚えていきます。▼だからこそ、イエスさまは、手足を癒すような業をしておられません。水が動いても良かった。イエスさまがこの男を抱えて歩まれても良かった。せめて、水を汲んで来てもらって良かった。しかし、手を置くことも、祈ることさえされません。問題が、手足ではないからです。▼福音書の奇跡物語は、ヨハネ9章等のごく少数の例外を除いて、同様であり、イエスさまは何もなされません。奇跡を信ずる信じないが、そんなことは問題外。イエスさまに出会ったかどうかだけが問題です。▼ラーゲルレーブ著『キリスト教伝説集』の『ブエロニカのハンカチ』を紹介しします。▼ローマ皇帝ティベリウスが病を得た時、乳母ブエロニカは東方の都に、どんな病気も癒やすと評判の預言者を求めて立ち立ちます。都に入ると、十字架を担いだ行列に出会います。彼女の力で力尽き跪いた男の茨の冠から血が流れ出ていました。駆け寄ったブエロニカがハンカチで血を拭くと、男は言います。「おまえの願いは今叶えられた。」▼ローマに帰って、ティベリウスに再会したブエロニカは、皇帝にハンカチに映った

男の顔を見せませす。その肖像を見た皇帝は、「私の周りにいるのは、人間の面を被った獣ばかりだ。しかし、これこそ本当の人間だ。この男なら自分を癒やしてくれたらう」と叫びます。▼その瞬間皇帝は癒やされてきました。人間不信から、その醜い思いが顔に出ていたのですが、根本から癒やされたのです。▼私たちにもブエロニカのハンカチがあります。それは聖書そのものです。▼聖書を読む目的は、イエスさまとの出会い以外にはありません。

2: エルサレムには羊の門の傍らに、ヘブライ語で「バトザタ」と呼ばれる池があり、そこには五つの回廊があった。  
3: この回廊には、病気の、目の見えない、足の不自由な、体の麻痺した人などが、大勢横たわっていた。  
3b-4>: 彼らは、水が動くのを待っていた。それは、主の使いがときどき池に降りて来て、水が動くことがあり、水が動いたとき、真っ先に水に入る者は、どんな病気にかかっても、いやされたからである。  
5: さて、そこに三十八年も病気で苦しんでいる人がいた。  
6: イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であることを知って、「良くなりたか」と言われた。  
7: 病人は答えた。「主よ、水が動くとき、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」  
8: イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」  
9: すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。その日は安息日であった。 … ヨハネ福音書5章。